



Data

監督：霍建起（フォ・ジェンチイ）
 出演：趙薇（ウィッキー・チャオ）
 / 陸毅（ルー・イー） / 宋曉英（ソン・シャオイン） / 張謙（チャン・チアン） / 崔敏捷（ツイ・ミンチエ） / 邢佳棟（シン・チャトン） / 伊人（イーレン）

👁️👁️ みどころ

親同士の確執と対立は、若い恋人たちには無関係。そう割り切ることができれば簡単だが、1980年代の中国では・・・？ロミオとジュリエットは愛に殉じたが、孤独に殉じた主人公たちの行き着く先は？

霍建起（フォ・ジェンチイ）監督特有の映像美の中で抱える、趙薇（ウィッキー・チャオ）の表情がすばらしい。張藝謀（チャン・イーモウ）監督+章子怡（チャン・ツイイー）の名作『初恋のきた道』（00年）の向こうを張ったような邦題の意味もしっかりと！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■必見理由 その1！霍建起監督作品■

私が絶対この映画を観なければ、と思った第1の理由は、霍建起（フォ・ジェンチイ）監督の作品だから。フォ・ジェンチイ監督は『山の郵便配達』（99年）（『シネマルーム5』216頁参照）、『ジョンヤンの酒家』（02年）（『シネマルーム5』218頁参照）、『故郷の香り』（03年）（『シネマルーム17』264頁参照）で有名な監督だし、この3作とも私の大好きな映画。

今回プレスシートであらためて確認すると、1958年生まれの彼は1982年に北京電影学院美術学部を卒業したとのことだから、張藝謀（チャン・イーモウ）や陳凱歌（チェン・カイコー）、田壯壯（ティエン・チュアンチュアン）らと同じ、再開後の北京電影学院の第1期生（もともと、チャン・イーモウは撮影科で、チェン・カイコーとティエン・チュアンチュアンは監督科）。そしてティエン・チュアンチュアン監督の『盜馬賊』（85年）（『シネマルーム5』67頁参照）に美術として参加したとのことだ。

日本では亡市川崑監督などが映像美を誇る監督だが、この映画で見せる映像美はフォ・ジェンチ監督特有のもの。

■□■必見理由 その2！趙薇主演作品■□■

私が絶対この映画を観なければ、と思った第2の理由は、趙薇（ヴィッキー・チャオ）の主演作品だから。私が彼女を観た最新作は、呉宇森（ジョン・ウー）監督の超大作『レッドクリフ』（08年）。ここでの彼女は孫権の妹尚香役という勇ましい姿だったが、その前は本木雅弘と共演し、北京大学生映画祭の最優秀女優賞を受賞した『夜の上海』（07年）（『シネマルーム17』433頁参照）。

私が1番印象に残っているのは、彼女が1人2役を演じた『緑茶』（02年）（『シネマルーム11』202頁参照）。『少林サッカー』（01年）と『天下無双』（02年）は見逃しているが、『クローサー』（01年）や『ヘブン・アンド・アース』（03年）（『シネマルーム5』152頁参照）を観ると、彼女が外国人俳優との共演に積極的に取り組んでいることがわかる。もっとも、かわいい、かわいいと思っていたヴィッキー・チャオも、1976年生まれだから中国でのこの映画の公開時は既に29歳。この映画は10代から30代までのヒロイン屈然（チー・ラン）をヴィッキー・チャオが等身大で演ずるが、セリフが少ない困難な状況下、彼女は見事にチー・ランの気持を表現している。

■□■女性は陸毅に注目！■□■

同じ官舎に住み、小学生時代からチー・ランの同級生として一緒に遊び、大学受験を控える中、互いの恋心を意識していたのが陸毅（ルー・イー）演ずる候嘉（ホウ・ジア）。このルー・イーは、『ジャスミンの花開く』（04年）における「莉の物語」（第2話）で章子怡（チャン・ツイイー）と共演し（『シネマルーム17』192頁参照）、『SEVEN SWORDS セブンソード（七剣）』（05年）（『シネマルーム17』114頁参照）では七剣士の1人で劉郁芳の恋人役の韓志邦役を演じていた正統派イケメン。したがって、女性ファンはこのルー・イーに注目！

■□■主人公は？テーマは？■□■

この映画の主人公は、ヴィッキー・チャオ演ずるチー・ランとルー・イー演ずるホウ・ジアの2人。そしてテーマは、恋人同士となった2人の交際と結婚を認めない互いの家の確執と対立。つまり、チー・ランのチー家とホウ・ジアのホウ家とは何か得体の知れない確執があり、そのためチー・ランの両親である屈父（張謙／チャン・チアン）と屈母（崔敏捷／ツイ・ミンチエ）も、また父親の死亡後母の手1つでホウ・ジアを育ててきたホウ・ジアの母候母（宋曉英／ソン・シャオイン）も2人の交際、結婚を絶対に認めないというわけだ。

そんなテーマを極限状態で描いた名作が、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』。モンタギュー家とキャピュレット家ほどの名門でなくても、家の確執と対立はあるもの。しかし、いくら自分の息子や娘が幸せな結婚を望んでも、それを絶対に認めないという権力が家（両親）にあるの？また、そんな風に自分たちの愛を家（両親）から拒否された若い男女の行き着く先は？

それがフォ・ジェンチイ監督が『初恋の思い出』で描くテーマ。したがって、この映画を少し乱暴ながらわかりやすく言えば、中国版『ロミオとジュリエット』といったところ・・・。

■時代は？舞台は？■

映画の冒頭、スクリーン上には大きな石の階段の上でじゃんけん遊びをする小学生の男女の姿が映し出される。これがホウ・ジアとチー・ランの小学生時代の姿だ。まず惹かれるのは、暗いトーンながらも微妙な陰影をうまく表現したこのシーンの映像美。その時代は1970年代らしいが、その舞台は？

残念ながら、日本人の私たちにわかるのは、ホウ・ジアとチー・ランが入学する地元の大学が東林大学と東林大学の分校ということだけで、それ以上の具体的な地名まではわからない。しかし、それに代わって重要な意味を持つのは、ホウ・ジアとチー・ランが



『初恋の思い出』発売中 発売元：ブロードメディア・スタジオ
販売元：ポニーキャニオン 価格：DVD¥3,800(本体)+税
(C)Starlight International Media Co.,Ltd. All Rights Reserved.

住んでいる官舎。これは4階建てくらいだが、もちろんエレベーターはなく、かなり古い共同建物。しかし、私が見る限り、車イス生活をしているホウ・ジアの母親と一緒に住むホウ・ジアの家はかなり広そう。

他方、父親と母親そして兄（邢佳　／シン・チアトン）と一緒に住んでいるチー・ランの家も、多分同じ部屋の広さ。したがって、4人家族のこちらは少し手狭で、チー・ランには個室はなく、その勉強机からリビングルームがお見通し。

さあ、そんな時代と舞台の中でホウ・ジアとチー・ランはどんな風に2人の愛を貫いていくの・・・？

■□■あの懐かしい映像が劇中劇で■□■

私がオリヴィア・ハッセーの『ロミオとジュリエット』（68年）を観たのは、大学2回生の時（68年）、京都。15世紀のイタリア、ルネッサンスの豪華絢爛さを見せつけるかのような舞踏会と、美しく着飾った紳士淑女たちの姿にビックリするとともに、この映画におけるあのオリヴィア・ハッセーの姿とあの美しい音楽が強く印象に残った。そんな映画が1980年代の中国で上映されていたことにビックリ。

チー・ランがシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の本に出会ったのは、たまたま眠っている寮友の手から本がこぼれ落ちたため。共に大学生となり自由な恋愛が楽しめるはずのホウ・ジアと私が、なぜ家族同士のいざこざのために引き裂かれなければならないの？そう考えたチー・ランが『ロミオとジュリエット』の世界にのめり込んでいったのは、ある意味当然。

ホウ・ジアとチー・ランがこの映画を観たのは、私と同じ大学生の時。もともと、私はこの映画をきれいだナという印象で観ただけだが、2人並んで食い入るようにスクリーンを観ているホウ・ジアとチー・ランが、そこで感じたものは・・・？

■□■やっと明かされる確執とは？■□■

映画のストーリーとしては仕方がないが、私がイライラするのは、大学生になったホウ・ジアとチー・ランが、家同士にどんな問題があったのかちゃんと説明してほしいと頼むのに対して、親たちが固く口を閉ざすこと。もう子供じゃないんだし、ちゃんと説明した方がホウ・ジアもチー・ランも納得しやすいと私は思うのだが、親たちがそれをしないため、ホウ・ジアとチー・ランのモヤモヤは晴れないまま、親に隠れて交際を続けることに。その結果、訪れる事態は最悪。つまり、はじめて入ったラブホテルではじめて結ばれた後、2人が選択した道は・・・？

それは映画を観てのお楽しみとしてここでは書かないが、その後やっと明らかになるのがホウ家とチー家の確執の原因。ホウ・ジアの父親が自殺したのはなぜ？それはホウ・ジアの父親が親しくなった職場の女性を妊娠させたとのうわさが流れ、チー・ランの父親が

党の代表としてそれを調査する中、女性が「強姦された」とハウ・ジアの父親を告発することになったため。自分の夫は女性を強姦するような男ではない。そう信じるハウ・ジアの母親は、女性の強姦されたとの告発はチー・ランの父親が誤った進言をしたためだと固く信じているわけだ。

ハウ家とチー家の確執の原因がここにあったことがやっと明らかになったわけだが、そこでなお難しいのは、ハウ・ジアの父親が誤った行動をとったのか否かということ。チー・ランからの厳しい追求(?)に対して、父親は「自分は良心に恥じるような行為は一切していない」と断言するのだが、娘の気持としてはもっと詳しく説明してほしいもの。さらにチー・ランは、「もし父が悪いことをしたのなら、父に代わって自分が謝る」とまで言うのだが、ハウ・ジアにしてみれば、今さらチー・ランに謝ってもらっても死んだ父親は生き返らない、と考えたのは当然。両家の確執の内容がわからないならわからないなりに、またわかったならわかったなりに、容易にハウ・ジアとチー・ランの気持の整理がつかないのは当然だろう。

■□■愛に殉じる?それとも孤独に殉じる?■□■

この映画の雰囲気ガラリと変わるのは、ハウ・ジアとチー・ランが「ある事件」によって警察に保護されてから。別の言い方をすると、ハウ家とチー家の確執と対立の原因が何なのかはハウ・ジアとチー・ランにもそして観客にも明らかになってから。

『ロミオとジュリエット』が書かれたのは16世紀。そして、シェイクスピアはロミオとジュリエットに対して何とも悲劇的な結末を用意したが、若いロミオとジュリエットにしてみれば、これは愛に殉じた美しい行為。しかして、1980年代に生きる中国の若者ハウ・ジアとチー・ランの場合は?

大学時代は短いようで長く、長いようで短い。楽しい4年間がアツという間に過ぎる中、ハウ・ジアはアメリカへ留学するという道を選択することになった。これはもともと頭が良く優秀であることの他、故郷からあるいはチー・ランから逃れるという意味もあるの・・・?ハウ・ジアとチー・ランは「ロミオとジュリエットは愛に殉じたが、私たちは孤独に殉じた」と語り合っていたが、さてそんな位置づけとその選択の妥当性は・・・?

■□■どっちが悪い?誰が悪い?■□■

日本には「オールド・ミス」という言葉がある。昔はこれは嫁にもいけなダメ女的イメージが強かったが、女性の自立が進み、アラサー、アラフォーがはやっている昨今、結婚しない女性が増えているのは当然。しかし、家の思想が根強く残る1980年代の中国では、娘がいつまでも嫁に行かないとなると両親も肩身が狭いようだ。

ましてチー・ランの場合、兄が愛する女性と相思相愛で結婚し、今や子供まで産まれているのだから、そろそろチー・ランも嫁に出さなければ、と両親が心配したのは当然。そ

れはホウ家も同じで、アメリカまで留学し戻ってきた優秀な息子が今なお独身のままでいるのは、チー・ランとの結婚に反対し続けたことへの当てつけではないか、と母親が心配したのは当然。ホウ家もチー家も、ホウ・ジアとチー・ランの結婚問題以外には何ら親子対立の根はないのだから、この問題だけで両家がこんなに長く不幸を引きずり続けるとは誰も予想しなかったはず。いつまでもこのまま2人を放置しておいてはダメだという考え方に火をつけたのは、チー・ランの父親が末期ガンに罹患していることが判明したためだ。

つまり、そんな事態になってやっと、チー・ランの父親はホウ・ジアの母親に電話をかけて、自分がホウ・ジアの父親に対してした行為を謝罪するとともに、ホウ・ジアとチー・ランを結婚させたいと申し出ること。そして、それを受けてホウ・ジアの母親も、ホウ・ジアに対してチー・ランを嫁にとるように進言すること。しかし、ちょっと待ってくれ。人間の気持ちで、そうそううまく整理することはないのでは？

こんなホウ家、チー家双方のやりとりを見ていると、ついついどっちが悪い？誰が悪い？と考えてしまったが、残念ながらその正解はなし・・・？

■□■ 2人の結末をどう予想？ ■□■

「初恋」のついたタイトルは多い。中でもチャン・イーモウ監督の『初恋のきた道』（00年）は日本人には有名だが、その原題は『我的父親母親』だから、原題とは無関係につけられた邦題。この映画の邦題はその向こうを張るかのような『初恋の思い出』だが、これも原題は『情人結』だから、原題と関係なしにつけた邦題。

ホウ・ジアとチー・ランの初恋はすんなり結ばれることなく2人は離れ離れになったが、ホウ・ジアがアメリカ留学から戻ってからは、昔の仲を復活させようと思えばできたはず。ましてや、2人がいつまでも独身であることを心配する親たちが今や2人の結婚を後押しするまでに変化したのだから、2人がそれを望めば実現できたはず。したがって、多くの人はこの映画の結末はハッピーエンドと予想？

もちろん、それでも『初恋の思い出』という邦題は妥当するが、それではちょっと平庸すぎ・・・？そう考えたフォ・ジェンチイ監督は、映画のラストのクライマックスをバレンタインデーに設定した。ある年のバレンタインデー。偶然まちで再会したホウ・ジアとチー・ランはレストランに入り、その場でホウ・ジアはチー・ランに対して「結婚しよう。幸せにする」とプロポーズ。そしてその直後、ウェディングドレスとタキシード姿の2人が記念写真を撮っているシーンに移るが、どこか2人はぎこちない。さて、それはなぜ・・・？また、カメラマンはしきりに「笑って」と催促しているのだが、2人の笑顔はどこかつくり笑い。さて、それはなぜ・・・？

そんなシーンを観ながら、この映画の邦題『初恋の思い出』をかみしめれば、『初恋のきた道』と同じように、なるほどよくできた邦題だと感心することができるのでは？

2008（平成20）年10月29日記



「初恋の思い出」

(今日から梅田ガーデンシネマで公開)



中国版「ロミオとジュリエット」は切なく美しく

親同士の確執や対立な
んか「そんなの、関係ね
え」。今ドキの若者のよ
うにそう割り切れればコ
トは簡単だが、それに悩
んだのが美少女の屈然
(趙薇)と幼なじみ

の候嘉(陸毅)。
共に大学を目指す中自
然に恋仲になった二人だ
が、「お前の父親は屈然

屈然の説明要求に対し父
親は「良心に恥じること
はしていない」と言うだ
けだ。
文化大革命が終わり改
革開放政策に移行して
も、一九八〇年代の中国

は交際が親に拒否された
ため自殺まではかる若者
の苦悩に焦点を当てたも
の。
テーマはもろろん純
愛。二人が安ホテルで初
めて結ばれるシーンが前

の都市では、封建的な恋
愛観が根強いのは当然。
そんな境遇は、十五世紀
イタリアのロミオとジュ
リエットとそっくり。オ
リヴィア・ハッセー主演
の六八年のあの名作を観
た二人がそう感じ、その
物語に自分たちを投影さ
せたのは仕方ない。

半分のハイライトだが、そ
の直後二人は愛に殉じる
の？ それとも孤独に殉
じるの？ また、ここで
はじめて明かされる両家
の忌まわしい隠された過
去とは？
母親の気持ちをよくんで
米国に留学した候嘉はま
だ独身。他方屈然も三十
歳を大きく過ぎてなお独
身だが、今父親は末期が
んに。そんな中やっと訪
れるのが両家の「和解」
だが、今更「娘と結婚し
てやってくれ」と言われ
ても…。太陽光を巧みに
使った陰と光の映像美が
霍建起監督の特徴だが、
ラストにはそのトーンが
急に明るく。こりゃハッ
ピーエンド？ いや、そ
れでは邦題に違和感が。
そんな彼らしい味わい深
いラストをじっくりと。